

石川書翰

福田英子宛

明治三八年九月十四日

僕はねー、八年めで、母の下へ帰省して、十日間母と共に食ひ且つ話して来たので、母の恵みを温かさがまだまだうすらぎもせぬのに、石川君と共にあなたの所で御親切になりました。

僕はねー、石川君や堺君は兄と思ふて、わがまゝして居るので、あなたに対しても姉さんと思ひますコレカラ姉さんとして下さいねー。

姉さんの内に月を見ながら姉さんの料理で御馳走になりましたが、潮煮ねー、あれは僕には、実(は)すこし(絵が入る)からかったよ。

そして朝飯をたべて、幸徳君を訪ふて兄さんに遇ふた思ひをし、奥さんに遇ふて姉さんに遇ふたやうでした。

十時二十分にねー

新宿を発し巣鴨の大日堂を訪ふたの、三時間斗り話して堺さん所へ泊って今小田原の友人の所に

着きました。

姉さんねー、凡ての苦痛はみんな、我報から発るのだからね、世の中の空の名空の財、うつせみの如き此身を捨てなさい今までの虚なる望みを捨て、新しき身とおなりなさい。きつと凡てが楽しくなりますからどーぞ個人的解脱をして、そーして社会主義につくして下さい。そーすれば無限の働きが出来ます。

なんぼ、此身は社会の犠牲にすると言ふても自己の願望を捨て、やらねば駄目です。コレだけは、僕は姉さんとして言ひます。

だがねー若し姉さんに御氣に容らぬ所があったら叱って頂戴ねー。

コレカラも時々我儘を言ひますからどーぞ、厄介の弟として頼みます。

石川君にも宣教言つて下さい。

石川三四郎宛

明治四十年六月八日消印

石川兄足下此頃の天気で頭の工合がわるくはありませんか。社会新聞の兄の手紙を見て安心しました。希くば天が兄に与へし靖安の獄中生活を尤も有功に過ぎしめよ。

伊藤兄より君の所へ時習（徳山小学校発行）を巢鴨へ送ったけれど本人不在とのことで返つて来たそりだ。それは君がまだ東京監獄におつた時であった。東京監獄の方へまた、だしたことでらう。今月三日の午後七時頃に水力電気の工夫と、土工がダイナマイトを取つて六十人の者が奮闘したが、僕は此時初めて労働者の勢力が高大な者であることを知つた。

為に一人の死者と他に重傷者もあつた、これは親分株の勢力あらそひから喧嘩をしたのだが、吾等の任務は、この勢力を尤も有益に人力最大幸福の為にするやうに、導くことである。次に僕は目下四畳半生活をして居るが、君見てくれ玉へ、雑座のそれか、長明のそれか。

書見をしながら三尺二尺六寸の窓より、東南を見れば梨に桜に柿、毎に月見草石竹にまでしこ、白えんどうが漢の食卓に上るべく、キャベツが来るべき夏の好物と僕の胃にいらんが為に握りつゝある。こんな田園趣味もマゝ食足るゝからですねー、来年山に入って、生活する積りである。（四畳半の絵が入っているが省く）

石川三四郎宛

明治四十年十二月六日消印

月に一回は是非娑婆の便りをいたさうと考へては居るのが、意の如くならぬで度々失敬する。十一月の紅葉時に絵はがきをやったのが、粗忽にも東京監獄と書いたので山口君のと二枚返ってきた。今日も僕の弟からはがきが来たが越後は三、四日前より雪が降って居るそうだ。はこね山は雪は降らぬが、庭一面に氷柱から立って居る。僕は此頃関東宗教史を書いて居るが、そのためにも夜も十二時過ぎまでは勉強して居る。今も三疊の書齋でペンを持って居るが寒くてたまらん。寒暖計は三十八度だからね、自分の寒いを思ふにつけ君等が思ひやられる何事も不自由なる獄中にあつては、之を愈する良法は絶対の福音よりなからうと思ふ。僕は君が此寒い冬を勤めて出た時は、まことにまことに信仰の力の何事にも打勝つ偉大を知れることであると喜んで待つて居る。僕も自分の信念を試みる為に獄中生活をして見たくなつた。いやせねばならぬ時は来て居るよ。

宗教が政治と一つになつて居る時代より分離して今は政治が宗教を利用しつゝある時ではあるが、神の道を奉ずる者は、利害に左右せらるゝ政治の下にあることは出来なではないか。僕は、近き将来には政治の必要を見ずして、人は各々絶対の信仰に依つて生活し往くの時來ることを、然り一

日も速にかくするは僕の天職と信ずる。君に如何

石川三四郎宛

明治四一年二月二日消印

監獄生活もモー下り坂となつたことネーしかし今年の一月は例年にない暖い方だ。此分では二月の寒さが案じらるゝ。出来得る丈の撰生をして二月の坂を越してくれ。この坂を越せばモー三月、野に居る鶯がなきだす。鶯のことを言ひば、昨年の暮に鶯を貰うて、友人の注意にまかせて世話したが時ならぬ十二月の末から鳴きだして、今僕の机の傍に盛に鳴いて居る(三疊生活に趣味を添ふて居る。)こゝを思ふと自然々々と言ふ呑気連よりも僕は人為的に圧制を逃れて早く自由の世界にしたいくなる。経済界の自然の成行など、言ふては居れない。三月に鳴く鶯を十二月に鳴かすことが出来るものを、いつまでも資本家と労働者の暗闘をつゞけさせることは僕には見て居れる。宣しく直接行動、全速力を以て、此自由の勝利を得ねばならぬ。そはとにかく、僕の三疊生活は冬になつて益々理想なつて来た。無暗に発展々々と言ふて国家の虚勢を張るよりも、分想応にやつて居るに

しくはない。僕の所も今は鵜が三羽居って日々卵を生んで居る。それに兎が三頭これまた不時の客を慰め得るのである。いま朝の飯を終って、君と山口君に二月の通信を書いた所である。鶯に促されたやうである。

福田英子宛

明治四二年二月二三日消印

久しく御無沙汰いたしました一月以来県下を旅行して三二日目で昨夜漸く帰宅いたし留守中の郵便物を調査して驚きましたのは

御老母の永眠記念号でありました思ひば昨年の秋御厄介になりし折貴姉のわた志の母は百までも生きましやうとその平生の壮生をほこられしもいまはあだごとく相成り候もあわれ死生は人事の常なれば、御力をとしなどのありべき善はなきこと、貴姉平生の修養にて愚察仕候親と言ふ重任を負はれながらあの御運働に献身なされし姉が今後の働きぶりこそさぞかしと僕は批評眼を以て眺め居り申候

警視庁も之より一層の注目いたすことゝ存じます。

二伸

昨冬より貴新聞の裁判一件も今春となりて二つ重なり候とのこといづれ現状維持を金科玉條と守休いたし居る当局は吾等に対する迫害はあらゆる方面より種々の道具を以て責めたつることならんも時には何人も抗ずることは出来ません此頃の寒烈にさへ梅といはず桃桜までが皆陽春の来りつゝを暗示いたし居り候吾等革命の先鋒たるもの此大潮の流るゝ所を察して専心うまず伝道に尽力いたすべきことゝ覚悟仕候

石川兄にも久しく無沙汰いたしましたが目下の健康は如何に候や一月十三日一寸妹の所へ往き神田から一電車貴社を訪問いたす積りなのが急に帰らねばならぬので失礼いたしました

僕は伝道方法につき石川兄と相談いたしたいこともあるので近い中に上京いたしたいと思ふておるが久しく寺をあけて今壇徒の衆に叱られて居る所彼岸すぎにでもならねば上京は出来ないと思ふどうぞ宜しく

あまり久しく無沙汰いたしました中に老母の永眠に驚いて辻褃のあはしない雑言をかくの通り

岡林・小松宛

明治四二年六月六日

こんな工合になるならいま一日か二日君たちの所で遊んで須磨や明石の月でも見せて貰うのであった。廿四日朝国府津の停車場へおれると、すぐ横浜へ来いと言ふ、何事もお上の仰せ御意のままに今当監獄へはいって居る。また裁判は初まらない、多分罰金ですむことであらう。僕如きに横浜の同志はたいへん心配して差入れ物などしてくれるから感謝に堪えない。中村君にも宣しく

岡林・小松宛

明治四二年七月七日

小松岡林両君の御見舞を感謝いたします。また岡林君は男子御出生の由、めでたく御祝ひいたします。御令園に宣しくいづれまた御訪問するの機会もこれあることと存じます。さて岡林君には無我の方面よりの御教訓ありがたく銘肝いたしますが希くばいま一層の御研究ことこそ願はしけれ。勿論私とて本件一点張りの論者ではありませんが従来宗教道徳が其本能性を没却して消極的に落

いった失敗は忘れてはなりません。

其故に仏教の真宗や基督教の新義はこの幣を逃れて積極的な愛と慈悲を以って旗印としたのはまた吾等の眼をつける所ではありませんか。されど彼等は情より吾等は理性より。

大石誠之助宛

明治四二年七月八日

御送りのイングリッシブック、四冊落手いたしました。十年以来なげすておいた、英語をやりますやうになつたのも、何かの暗示でありませう。ここで四五年もやりませば、立派に卒業が出来ませう。きけば東京の方の雑誌も二号ともやられたそうであります。こんどは管野幽月君が著名人だそうで、あの病人を獄に投するのは、気の毒のやうですがどうしていますか。公判は七月一日だそです。私の方は一昨二四日予審の証拠しらがすんだやうです。近い中に公判となりませう。何も恨みはないが神戸まで行って御宅を訪問せなかつたことが残念だ。

大谷愛子宛

明治四二年九月九日

二枚の絵端書と一枚の端書今日一時に拝見することができて早速御返事をかきます。娑婆と地獄とはいちようにわかりません。私を五月二三日角袖警事に尾行せられて神戸を出て二十四日午前十一時に横浜伊勢佐木警察署へ検束せられ、署長高橋警視の取調べを受け、二十九日当監獄に折留せられて以来八月二十七日まで接見禁止、しかも初めは通信を許されておりしが、七月以来殆ど六ヶ月間通信を禁じられ、一切娑婆の悲惨を目耳にせず、英語と政治経済学を研究致しておりました、漸く八月二十七日附を以て左の予審終結決定書に接しました。

出版法違反及爆発物取締罰則違反被告事件云々、それで今日は七月以来の端書と封書三十八通を一気に読み終わりました。此分では近々公判決定のことゝ存じます。先日貴倶楽部よりの端書にて大阪の火事と近江の地震とを承知いたしました驚きました。が扱て居は気を移すとやら、こうして衣食住に心配なく資本家の横暴も労働者の虐待せらるゝを聞かず見ずに居ると、恰かも天国へでも生れた様のが気になりました。併しやはり人間と言ふ動物の寄合であるから、改良すべき点は沢山ある。こんなことを考へて出獄後の研究材料にもと日記に改良すべき監獄官吏のことを書いてたために、日記を

取りあげられた。何れ命あつて出獄したなら再び大阪へ遊びたい者と思つておる。倶楽部員諸氏に宜しく。裁判の確定までに今一度書物を出す。諸君の之に対する返事は恐らく間にあわぬかも知れぬ。

石川三四郎宛

明治四二年十二月十四日消印

熱情のこもつた御手紙に接し、思わず感涙が浮びました。此頃はまた、幸内久太郎君、藤田四郎君、及び貴下の弁当を頂戴いたして、孤独の身の心強いような気が致しました。

会心の書をよんで、其中に梗概を書送るとの報は、飛立つ斗りうれしく、鶴首して待つて居ります。併し年末多忙の際、そうヤキヤキもして居らん。

身体が大事だから、勉強も徐々にして精神は安態に養つて居る。ここへ来ていさゝか従来の修養が験を示して来たようだ。

多忙の際恐れいるが、便宜がないので今日貴下へ宅下書を送つた。だれかに頼んで受取つて貰い

たい。經濟書は新村君のだ。父と子は保子さんのであるが、次手に届けていただきたい。

貴下の注意で初めて知れた、書籍の監下にならないことを、聖書は自分の所にあるから、貴下の方は御返しする。(今日は間にあわん)、そうして宅下受け受取りの際、聖書の注釈は入れてくれ給へ。

貴下が初めに入れたと言ひ文芸書類は、まだ知らせがない。何と言ふ本だか、知らせて下さる、調べて見るから。

幸内、藤田、坂本の諸氏へは住所が知れんで手紙が出せんから、貴下より宜しく申して下さい。

吉田弁護士に面会して、真末を話した。今後とも何分諸君の尽力を頼む。福田姉へも宜しく。

宅下は、すまないが、早く受取って下さい。新しい本が読めぬから、御察しを願います。 草々

石川三四郎宛

明治四三年三月十九日消印

御書面ありがたう。裁判も確定いたしたとのこと、何卒身心の健全なる発達を祈る。(僕の裁

判は三月三一日になった)ラルネデの講義、新村君の手を経て返却する。阿部清郎君の馬太伝を見たが、其新派の人達の煩悶がいかにあるかを察するに足りません。

私幸にながき獄中生活をば、此等の研究に費すを得るを歓迎いたします。ポツポツ英語をやつて居る。君が出獄してからも宜しいから、英語改正訳のバイブルを購求方の労を、とつていただきたい。其外英語の進むにつれて、購求したい者を、山岸の手をへて、君に頼むであらうから、其横りで承知を願ふ。

福田姉は壮健にあらせらるや宜しく申していただきたい。 以上

石川三四郎宛

明治四三年一月二五日

獄舎の新年、到底門外漢の何ふことの出来ぬ、趣味を覚えました。十五日の裁判はいかゞでありましたか。御知らせを願ひたい。年末の差入れくだされし、福田、堺、大須賀の謝大姉へ宜しく願ひます。手紙が出せぬので、また大須賀女史に叱られることゝ存するが、身閑にして信書多忙で困

ると申して下さい。ラルネドの福音講解、うまく説明をしてはゐるが、百尺竿頭、一步を進めて欲しいやうの気がする。近しい中に阿部清郎君と宮川経輝の著述を差入れられると言ふ人があるから楽しみにして居る。目下の僕のキリストに対する信仰を言ふて見ると、奇跡を信ずること、されど之が為に独りイエスが特別に神より授けられた者とは信ぜぬ。又復活も事實は否定はせぬ。それが世界の救済にさほどの功力ある者とは信ぜられぬ。いづれ出てから教を乞ふことにしやう。

昨日井本弁護士が接見してくれて、出版物の内容が知りたいから、石川君の方からでも廻はしてくれーとのこと。それでいろいろ考へて見たが、之は竹内善朔君に頼んだなら、二種とも一部づゝ位ある所が知れやうから、君御手数でも、竹内君にはがきで頼んで井本君の方へ廻はしてくれ玉へ。(秋水の病気はどんな) 山口兄が出獄したとのことであるが、一陽來復の兆かネー。

宅下を君に頼むのも恐れいるが、こんど規則が違つて名宛をいれることとなつた。それで君に頼むことにしたが、これは神田束紺屋町四三の義弟山岸順蔵方へ坂本君にでも頼んでも送つていただきたい。其外右山岸へはがき一本出して下さい。用点は、(武揚堂へは手紙を出したから、早速往つて契約して来てくれ。金は五円払込んで宜しいと申す意味、次に政治に面会にくるやうに) 申送つて下さい。之からは坂本君に宅下げを頼みたいから、番地を知らせていたゞきたい。諸兄姉に

宜しく伝言頼む。

石川三四郎宛

明治四三年三月七日消印

バイブルのことに付てありがたう。また、妹を訪ふて下されしとのこと感謝いたします。これで当分(随分長い当分だろう)君に手紙を出せないで、なにかかけば宜いか知れぬ。今日の手紙は大須賀、大杉の二女史にあげる考であつたが、君が十五日過ぎには下獄と聞いて君に出すことにした。

此程も坂本君が来て話をき、又手紙でもいろいろのことが知つたが、どこも皆さんがあまり潔癖ではあるまいかと僕は思ふておるよ。之に就て僕は諸君保護の下にバイブルを研究してあのイエスが、自己の真意に反する十二弟子を、死に至るまで教導しておつた所を見て、何とも言ひぬ感じが起つたよ。清濁ともに呑むと言う東洋流の豪傑もほめたことではないが、小異を捨て、大同を以つて交はり、而して私情と公義とを同一にして分離するなどは、アマリ感心せないではないか。之等

はツマリ信仰の強弱に關することであらうと思ふが、君は何と思ふ。

僕も便利の世の中で監獄生活をつゞけるので、字典と文典と対訳との為に英文を読むのが、此頃は面白くなって来た。君が出獄して後、神田辺を心がけておいて、ウィブスターの字書の古本があったなら、買って入れてくれ玉へ、(金は山岸にある)勿論マダ原書の字典は使はれぬから急ぐとはなす。

四月中には裁判が決定するであらう。そうすれば、此後山岸方から間接に僕の動靜を聞いてくれ玉へ。

くれぐれも身心の健全を期し自愛自重せられんことを祈る。

福田女姉へも宜しく申し上げて下さい、さやうなら。

大石誠之助宛

明治四三年三月二八日

久しく御無沙汰致しましたが、御変りはありませんか。昨年来いろいろ御配慮に成った英語が今

日は面白くなって来ました。これではよし監房はせまくも心の中は一個の広さを増したので何よりうれしく御礼申し上げます。

又先日は幸徳君の手より貴下の差入弁当をいただき之れまた深く御礼申し上げます。私の裁判は三月三一日午前九時控訴院第四部にて開延と定まりました。

此分では四月中には法延と存じます。決定すればすぐに服役いたし其間もっぱら英書を友とする覚悟であります。どうぞ時に海外の雑誌新刊書(すべて貴下の読み古して宜しい)の差入を願いたい、東京の同志も追々帰られましたのであまり暗潮が面白くありません。堺兄でも帰られましたら、また一陽來復の青芽も出ることでありませうよ。私も幸に長いことでありますからスツカリ勉強が出来ることと悦んでおります。どうぞ御身体大切になされ出獄後面白い話の出来るやうに祈っております。私も心中一点の苦痛がないので、永い獄中生活も此分では安楽のことと存じます。さやうなら

石川三四郎宛

明治四三年十月十五日

石川兄足下、僕は十月九日より昨日まで東京に遊んで居った。兄が堺兄への手紙も昨夜拝見した、東京は晴天の時は暖かいが、雨の時は勿々寒い、獄中は寒いの報に接して、思わず涙が出た。気が弱いと叱ってくれるな。

十月の中頃から、寒いと言ふやうでは此冬が思ひやられるのであった。

福田姉が在京ならば一所に連れて往って頂かうと思ふて居たが、それも駄目になって、今日は自宅に帰らねばならぬこととなって、今帰った所である。

堺兄の所へ五泊して、西川兄の所へ一泊し、其間金曜講演に日曜の研究会に出席して同志の意向なる者を察して見た。

目下一問題たる分派なる者は君、それほど心配することはないよ。これは自然に発るべきことであると僕は思ふ。それに就て尤も悲むべき位置にあるのは、片山君である。社会主義といふ者が、一定不変の經典に依つて将来ともに進行すべき者と思ふて、モ―頭が固つて居るのだから、青年の進歩せし思想を危険として居る。それも宜しい、二十世紀の今日でも十五六世紀の思想もあり、又

大古の思想もあるのであるから宜しいが。

要するに今回の分派は其裏面機関紙を私してそれに依つて衣食せんとする傾向が其根元である。僕が七日間の視察ハこの結論を生みだした。兄は今静想の時であるから、宜しく修養に意をつくされる寒い時にハネ―、坐禅をするのが一番である。僕の経験に依れば、一生懸命でやるときには、寒中に裸で出来る者だ。併し頭で考てはダメ。

……(数行伏字になっている)……今日は菊の節句で栗と柿の好時節だ。

庭の柿をチギツテ来て吾が在監の同志に手向けた。

十一日に裁判所で山口兄と大杉兄に遇った。話は出来なかつたが、目と目で将来の運動を期し真理は永遠に存在する者なれば吾同志の運動も永遠に勝利を得るべしと之を祝して別れた。

堺 利彦・為子宛

明治四四年一月二二日

寒い、今日は雪が降る。こんな寒いに火の気のない監獄の中で手紙を書くのもあまり面黒くないことではあるが扱て死刑の輿命に接して見ると懶しても居られないので入監以来多大の厚意を受け

し夫人爲子さんと先日僕のバイブルを差入れてくれた君に対して最後のたよりを書かねばならぬ。
願わくば目をつぶる前に一度遇つて大に笑話をしたいのだ、それも出来ない、君は昨年十一月、
僕が十二年の宣告を受けた時に断腸の思いがすると言つたそうだが今度はどうな思ひです。二年間
沈黙を守りし君は出てから×××先日君の送つてくれたバイブルの中に「義朝は拔身ひつさげ討死
せり」言ひ句があつた。吾等二十四人も近々拔身だけはひつさげて討死することになつた、オット
幽月だけは例外だ。

こんな馬鹿言つて居る中に用紙が半分なくなつた、併し安心してくれ君の送つてくれたバイブル
は死ぬまで読んで居るから。

実は何か彫刻して記念を送りたいのだが今は駄目だ、そこで神田の義弟の方から僕の読んだ本を
送るとせるから受けてくれ玉へ。

守田、岡野、戸垣、櫻等の諸兄へも手紙を出したいが住所が知れないから止しにした、遇つたら
宜しく頼む、×××爲子さん昨年はいろいろありがたう、此話は咲子さんに遇ひましたら真あちや
んにも宜しくね、まあこれで僕は止める、君の方からも何か書いて送れ、これ特別許可になるの
だ。

平民新聞に見る内山愚童

余は如何にして社会主義者となりし乎。

▲内山愚童氏（相州箱根）余は仏教の伝導者にして曰く一切衆生悉有仏性曰く此法平等無高下曰く
一切衆生的是吾子之れ余が信仰の立脚地とする金言なるが余は社会主義の言ふ所の右の金言と全然
一致するを發見して遂に社会主義の信者となりしものなり（第十号 明治三十七年一月十七日）

▲箱根大平台より 小生居住は海拔一千尺・温泉の無いのが欠点に候へども……小生は昨年四月本
師に死なれ、其後慈に住職いたせし所謂新世帯でござる……小生は独身生活で家内猫の親子と小生
とで三個米は村の人が持つて来てマア三人なら食ふ丈あります……小生居宅は小生居住中夏期平民
倶楽部として広く同志の来遊を待、二三人連の一二泊は山料地にて平民的同臥の覚悟さへあれば何
時にも歓迎致候（内山愚童）（第三六号 明治三十七年七月十七日）